

抽象風景歩くふたり

文人
武藏野

村上春樹の長篇小説「ノルウェイの森」の「僕」は、幼馴染の直子と再会し、四谷から駒込へ歩き、駒込から新宿へと、皇居に接する都の北西部に円を描くように「東京の町」を移動します。「僕」はそれを認識していますが、直子にとつては「僕」を歩いているのか把握することができない

村上春樹 ②

「じ」でもない場所」です。

「僕」の住む男子学生寮の

ある地名は明記されていませ

んが、正面には「巨大なけや

きの木がそびえ立つ」いま

す。直子の住むアパートは「国

分寺」にあり、「武藏野のは

ずれ」の女子大に通っています。

近郊で武藏野らしい雑木

林や草原を歩くことは可能で

したが、ふたりが会うのは、

風景としての記憶が残らない

「東京の町」でした。

日曜日になると、「僕」と

会うために彼女は「中央線」

に乗ってやってきます。「坂

直子が住んでいた「国分寺」にある国分寺駅。中央線が走っている



直子は、20歳を迎えた日に

「僕」と肉体的に結ばれ、傷

つき、その日を最後に「武藏

野のはずれ」から西方の「京都

の山の中」の奥に移動します。

「僕」は、彼女を追うよう

に西に移動し、吉祥寺へ転居

します。直子を追つて「京都

の山の中」を訪れた「僕」は、

以前のように直子と歩きます

が、「僕らは草原を抜け、雑

木林を抜け、また草原を抜け

た」とあります。

「僕」は吉祥寺に帰り直子

を待ちますが、実際に「武藏

野の風景」を見たのは直子で

はなく、彼女の死を知らせて

くれたレイコさんでした。

「僕」と直子は、武藏野を巡

つてすれ違い、現実の武藏野

で「武藏野の風景」を見るこ

とができずに終わります。

（武藏野大教授、むさし野文

学館館長・土屋忍）

を上り、川を渡り、線路を越え、どこまでも歩きつづけた。どこに行きたいという目的など何もなかつた。ただ歩けばよかつたのだ。まるで魂を癒すための宗教儀式みたいに、我々はわきめもふらず歩いた」とあるように、「東京の町」を歩いているのです。

ふたりが歩いたのは固有地名によって跡づけられるよう名によって跡づけられるような具体的な空間ではなく、「草原」と「雑木林」の風景でした。いわば抽象化された「武藏野の風景」の中で、「僕」は直子の記憶の核心、心の傷

過去の連載は、読売新聞オ
ンラインでお読みい
ただけます。スマ
ートフォンはQRコードから。

*

（武藏野大教授、むさし野文
学館館長・土屋忍）